

SB24(図版11 附表5・36)

検出状況 建物群3の南西部に位置する(第107図)。建物全体が検出されている。SB22の東側に位置する。SB23・SB25と平面的に重複し、P1とP2がSB23のP2とP3に切られている。SB25との前後関係については、調査では明らかにできなかった。他の遺構との切り合い関係は認められない。

建 物 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第111図)。両桁行の規模が異なるため梁行は平行せず、平面形は台形傾向にある。また、梁行の柱通りにも乱れが認められる。

建物の規模は、南桁行(P5-P7)で3.10m、東桁行(P3-P5)で2.00mを測り、両者を基準とした建物の面積は6.20m²と小型の建物である。南桁行を基準とした棟軸方向はN76° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表5の通りである。

柱 穴 全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は全体的に梢円形傾向にある。いずれの柱穴とも検出面からの深さが10cm未満と浅い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表5の通りである。

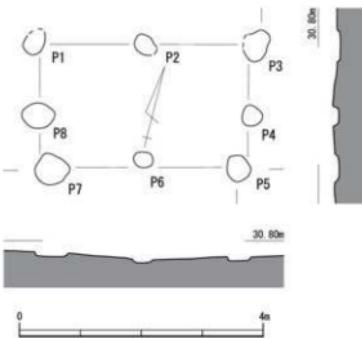
出土遺物 P3・P5・P7から土器が出土している(図版11)。

P3出土土器 土師器の鍋の頸部から体部にかけての小片が出土している。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

P5出土土器 須恵器の杯(272)が出土している。口縁部がわずかに残存する。外面は自然釉の付着が顕著なため、調整を観察することはできない。

P7出土土器 土師器の壺が出土している。体部の小片が残存し、外面はハケにより、内面はヘラ削りにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。

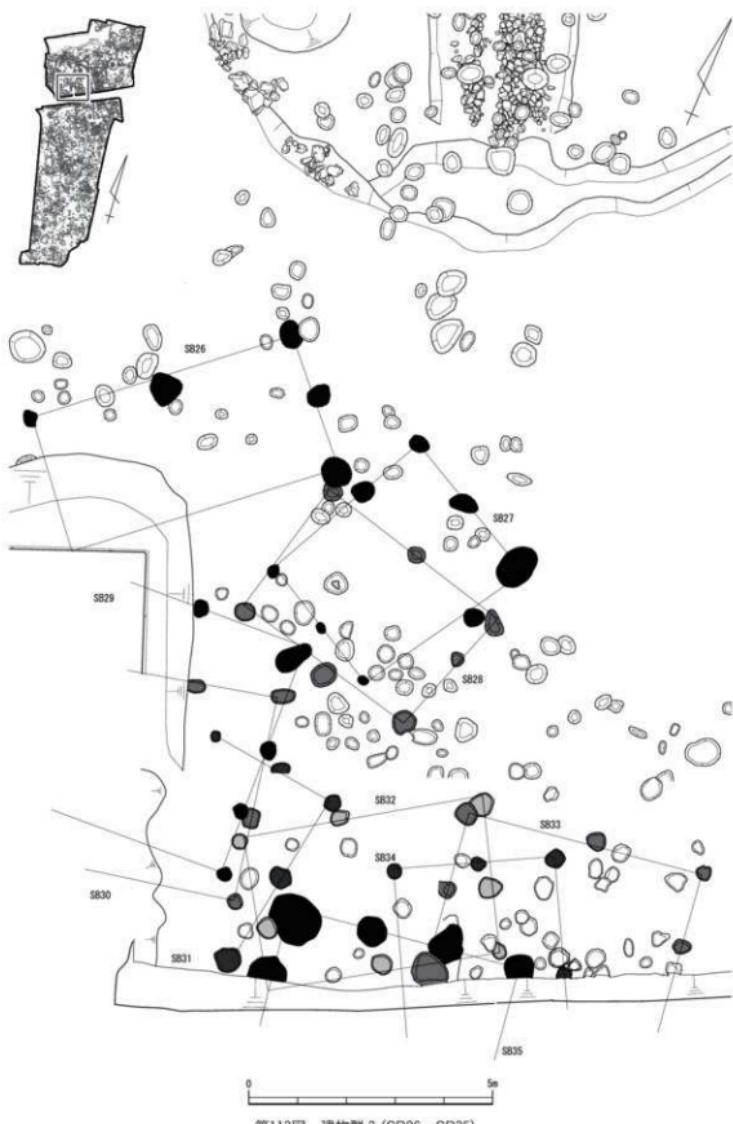
時 期 SB23との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第111図 SB24



第112図 建物群3 (SB26～SB35)の調査



第113図 建物群3 (SB26～SB35)

SB25(附表5)

検出状況 建物群3の南西部に位置し(第107図)、SB22の東側に位置する。SB23・SB24と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。また、建物の北東側については後世の擾乱を受け、南東側については調査区南端に隣接しているため、建物東側の範囲については明確にしえれない。他の遺構との切り合い関係は認められない。

建 物 北東 - 南西方向に棟軸をもつ梁行2間の側柱建物で、桁行については2間もしくはそれ以上の可能性が考えられる(第114図)。検出した範囲で桁行は平行し、桁行と梁行は直交関係にあり、整った平面形をなしている。柱通りも比較的良好である。建物の規模は、北西桁行(P1-P3)で3.80m、南西梁行(P1-P5)で3.30mを測る。また、南東桁行(P4-P5)を基準とした棟軸方向はN64° 15' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表5の通りである。

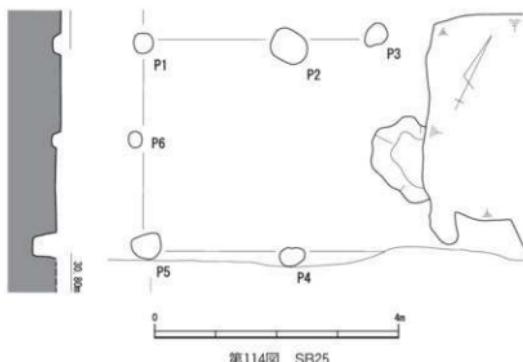
柱 穴 柱穴はP2を除いては小規模で、平面形は梢円形もしくは隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表5の通りである。

出土遺物 P1とP6から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P1出土土器 土師器の壺の体部小片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

P6出土土器 土師器の杯もしくは碗皿類の体部の小片が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

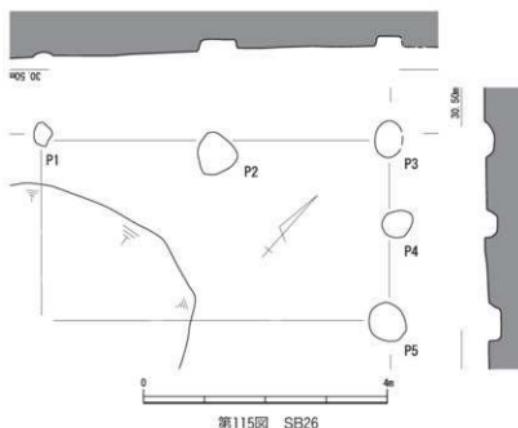


第114図 SB25

SB26(附表5)

検出状況 建物群3の北東部、SB21の南東側に位置する(第107図)。他の遺構との切り合い関係は認められない。建物南東部は貯水槽の設置に伴い削平されている。

建 物 北東 - 南西方向に棟軸をもつ桁行2間、梁行2間の側柱建物である(第115図)。桁行については2間分検出されているが、他の建物の規模から判断して2間と考えられる。梁行と桁行は直角関係にあり、整った平面形をなしている。一方、柱通りについてはわずかに乱れが認められる。建物の規模は、北西桁行(P1-P3)で5.65m、北東梁行(P3-P5)で3.00mを測り、両者を基準とした面積は16.95m²である。北西桁行(P1-P3)を基準とした棟軸方向は、N48° 30' Eを示している。各柱穴間



の距離等は附表5の通りである。

柱穴 北西桁行と北東梁行の柱穴が検出されている。柱穴の平面形は隅丸方形もしくは梢円形傾向にある。検出面からの深さは全体的に浅い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表5の通りである。

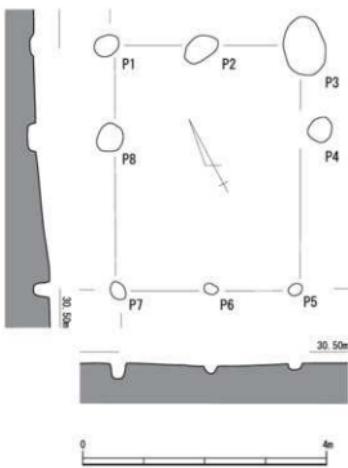
出土遺物 全く出土していない。

時 期 他の構造との切り合い関係および出土遺物から判断することは困難である。棟軸方向から判断して、南構Ⅶ～Ⅱ期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB27(附表6)

検出状況 建物群3北東部に位置する(第107図)。SB28と平面的に重複するが(第113図)、SB28との前後関係については調査では明らかにできなかった。建物全体が検出されている。

建 物 北東～南西方向に棟軸をもつ桁行2間、梁行2間からなる側柱建物である(第116図)。梁行・桁行とともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。一方、両桁行の中間柱はともに北東側へ偏った位置にある。建物の規模は、南西梁行(P5～P7)で2.95m、北西桁行(P7～P1)で4.00mを測り、両者を基準とした建物の面積は11.80m²である。北西桁行(P7～P1)を基準とした棟軸方向はN28°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表6の通りである。



柱 穴 全ての柱穴が検出されている。P3が際立って大規模であるのに対し、南西梁行の3穴は小規模である。柱穴の平面形は梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。

各柱穴の規模は附表6の通りである。

出土遺物 全く出土していない。

時 期 他の造構との切り合い関係および出土遺物から判断することは困難である。棟軸方向から判断して、南構VI期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB28(附表6)

検出状況 建物群3北東部に位置する(第107図)。SB26の南東側に位置する(第113図)。SB27と平面的に重複するが、SB27との前後関係については調査では明らかにできなかった。建物全体が検出されている。

建 物 東西方向に棟軸をもつ桁行2間・梁行2間からなる側柱建物である(第117図)。梁行・桁行とともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。ただし東梁行の柱通りについては乱れが認められ、その中間柱は北側へ偏った位置にある。また、西梁行の中間柱は検出することができなかつた。

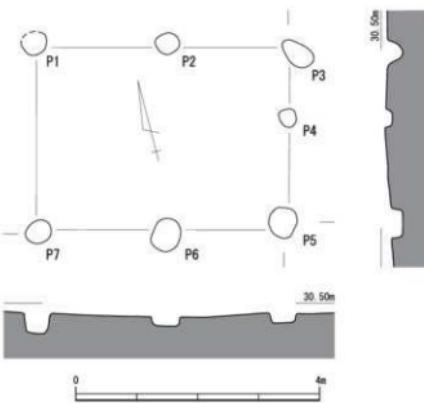
建物の規模は、南桁行(P5-P7)で4.00m、東梁行(P3-P5)で2.75mを測り、両者を基準とした建物の面積は11.00m²である。南桁行(P5-P7)を基準とした棟軸方向はN75°30'Wを示している。

各柱穴間の距離等は附表6の通りである。

柱 穴 西梁行中間柱を除く全ての柱穴が検出されている。このなかで、P1については他の柱穴に切られている。柱穴の平面形は、隅丸方形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表6の通りである。

出土遺物 全く出土していない。

時 期 他の造構との切り合い関係および出土遺物から判断することは困難である。棟軸方向から判断して、南構VII期～Ⅷ期に位置付けられる(第7章第1節)。



第117図 SB28

SB29(附表6)

検出状況 建物群3の東側に位置する(第107図)。SB30・SB31と平面的に重複し(第113図)、P4がSB30のP3を切っている。SB31との前後関係については調査では明らかにできなかった。建物西半は貯水槽設置に伴い削平されている。他の造構との切り合い関係は認められない。

建 物 南北方向に棟軸をもつ桁行3間からなる側柱建物である(第118図)。梁行については、他の

建物の規模から判断して2間からなるものと考えられる。東桁行(P2-P5)の規模は4.80mを測り、これを基準とした棟軸方向はN3°15'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表6の通りである。

柱 穴 建物が検出された範囲については、全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は円形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表6の通りである。

出土遺物 P2から土器器の壺と碗が出土している。全て小片のため図化できなかった。

壺は、壺Icの口縁部片と体部の小片が出土している。

壺Icは長胴タイプに分類されるもので、外面には煤の付着が認められる。体部の小片は、内面がヘラ削り、外面が縱方向のハケにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。碗は体部の小片が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB30(附表6)

検出状況 建物群3の東側に位置する(第107図)。SB31・SB29と平面的に重複し、P3がSB29のP4に切られている(第113図)。SB31とは調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。建物南西部は貯水槽工事に伴い削平され、南側は南側調査区外へ拡がる可能性も考えられる。

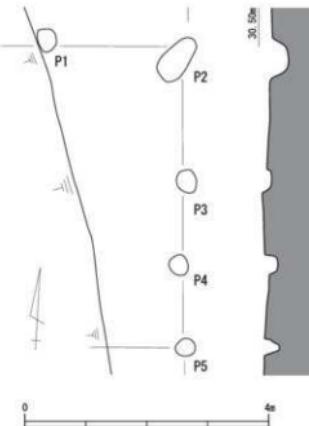
建 物 南北方向に棟軸をもつ側柱建物で、梁行で1間、桁行で2間検出されている(第119図)。他の建物の規模から判断して、梁行については少なくとも1間分は拡がるものと考えられる。桁行についても南側調査区外までのびる可能性も考えられる。

東桁行(P2-P4)の規模は4.40mを測り、これを基準とした棟軸方向はN11°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表6の通りである。

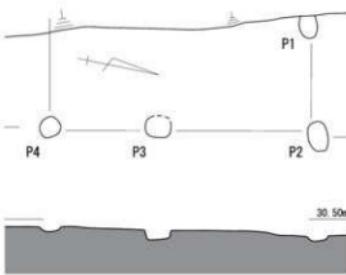
柱 穴 北梁行から東桁行にかけての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、円形もしくは梢丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表6の通りである。

出土遺物 全く出土していない。

時 期 出土遺物から判断することは困難である。棟軸方向関係から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第118図 SB29



第119図 SB30

SB31(附表6)

検出状況 建物群3南部に位置する(第107図)。SB29・SB30・SB32と平面的に重複するが(第113図)、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。建物南西部は貯水槽設置に伴い削平され、南側は南側調査区外へ拡がり、建物全体は検出されていない。

建 物 南北方向に棟軸をもつ側柱建物で、梁行・桁行ともに2間検出されている(第120図)。他の建物の規模から判断して、桁行・梁行ともこれ以上拡がらないものと考えられる。ただしP2に対応する中間柱は南梁行では検出されていない。

建物の規模は、北梁行(P1-P3)で2.80m、東桁行(P3-P5)で3.95mを測り、両者を基準とした建物の面積は11.06m²である。東桁行(P3-P5)を基準とした棟軸方向はN 9° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表6の通りである。

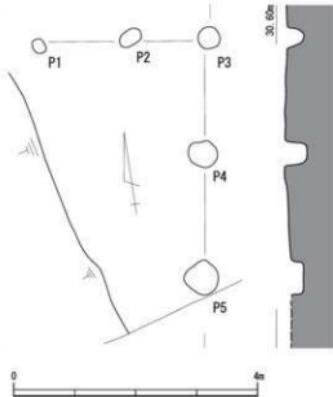
柱 穴 北梁行から東桁行にかけての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表6の通りである。

出土遺物 P3とP4から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P3出土土器 土師器の壺の体部の小片が出土している。

P4出土土器 土師器の壺と椀類が出土している。壺は体部の小片で、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。椀類は体部の小片が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ～Ⅸに位置付けられる(第7章第1節)。



第120図 SB31

SB32(図版11 附表6・36)

検出状況 建物群3南東部に位置する(第107図)。SB30・SB31・SB33・SB34・SB35と平面的に重複し(第113図)、P3がSB33のP1に切られ、P7がSB35のP1を切っている。他の建物との前後関係については、調査では明らかにできなかった。また建物南隅は調査区外にあたり検出されていない。

建 物 北東～南西方向に棟軸をもつ桁行2間、梁行2間からなる側柱建物である(第121図)。梁行・桁行ともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。ただし両梁行の柱通りについては乱れが認められる。さらに北西桁行の中間柱(P2)は南西側へ偏った位置にある。建物の規模は、北西桁行(P1-P3)で5.05m、北東梁行(P3-P5)で3.05mを測り、両者を基準とした建物の面積は15.40m²である。北西桁行(P1-P3)を基準とした棟軸方向はN60° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表6の通りである。

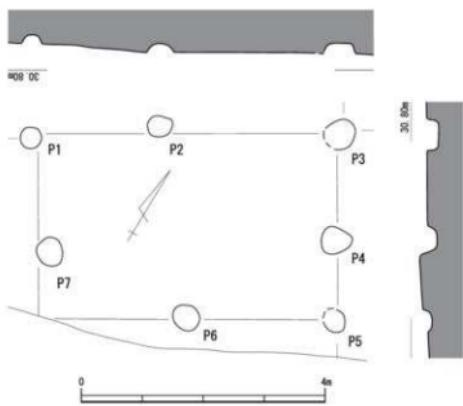
柱 穴 南隅が調査区外にあたり、1穴を除く。柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表6の通りである。

出土遺物 P2・P6・P7から土器が出土している(図版11)。

P2出土土器 土師器の壺の体部の小片が出土している。

P6出土土器 土師器の壺の体部の小片が出土している。

P7出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯の体部の小片が出土している。須恵器は椀の底部(273)が出土している。椀Daに分類されるもので、底部は平高台をなし回転糸切りにより切り離されている。全体的に回転ナデにより仕上げられている。



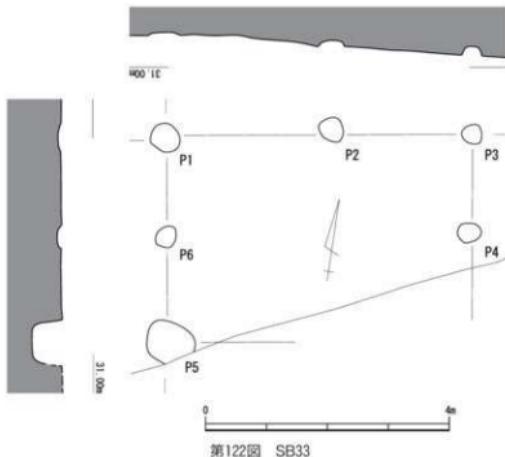
第121図 SB32

時一期 SB35との切り合い関係・出土遺物から、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB33(附表7)

検出状況 建物群3南東部に位置する(第107図)。SB32・SB34・SB35と平面的に重複し(第113図)、P1がSB32のP3を、P5がSB35のP3を切っている。SB34との前後関係については調査では明らかにできなかった。また建物南東部は調査区外にあたり検出されていない。

建物 東西方向に棟軸をもつ桁行2間・梁行2間からなる側柱建物である(第122図)。梁行・桁行とともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。柱通りも良好である。建物の規模は、北桁行(P1-P3)で5.00m、西梁行(P5-P1)で3.40mを測り、両者を基準とした建物の面積は17.00m²である。



第122図 SB33

北桁行(P1-P3)を基準とした棟軸方向はN81°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表7の通りである。

柱 穴 建物南東部の2穴が調査区外にあたり、検出されていない。柱穴の平面形は隅丸方形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表7の通りである。

出土遺物 P1とP5から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P1出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。長胴に分類されるタイプで、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。須恵器は杯の口縁部から体部にかけての小片が出土している。

P5出土土器 土師器の壺の体部の小片が出土している。

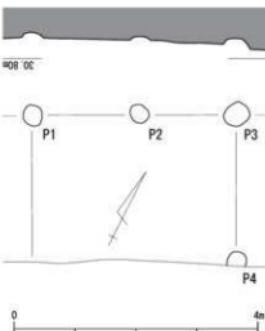
時 期 SB35との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構壇-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB34(附表7)

検出状況 建物群3南東部に位置する(第107図)。SB32・SB33・SB35と平面的に重複するが(第113図)、いずれの建物との前後関係についても調査では明らかにできなかった。また、建物南東部は調査区外にあたり、検出されていない。

建 物 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間からなる側柱建物である(第123図)。桁行については1間分検出されているが、少なくとも2間はあるものと考えられる。梁行と桁行は直角関係にあり、整った平面形をなしている。梁行の柱通りも良好である。北西梁行(P1-P3)の規模は3.35mを測り、これを基準とした棟軸方向はN63°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表7の通りである。

柱 穴 P4に対応する南西桁行の中間柱を欠く。柱穴の平



第123図 SB34

面形は、円形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表7の通りである。

出土遺物 全く出土していない。

時 期 出土遺物から時期を判断することは困難である。SB32・SB33・SB35との関係・棟軸方向から判断して、南構壇-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB35(附表7)

検出状況 建物群3南東部に位置する(第107図)。SB32～SB34と平面的に重複し(第113図)、P1がSB32のP7に、P3がSB33のP5に切られている。建物の大半は南側調査区外へ拡がり、検出できたのは北桁行と西梁行の一部に限られる。

建 物 東西方向に棟軸をもつ、桁行3間と考えられる側柱建物である(第124図)。他の建物の規模から判断して、桁行についてはこれ以上拡がらないものと考えられる。梁行の規模については少なくと

も2間はあるものと考えられる。北桁行(P1-P4)の規模は4.80mを測り、これを基準とした棟軸方向はN82°15' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表7の通りである。

柱穴 建物を検出した範囲では全ての柱穴が検出されている。このなかで、P1とP3については他の柱穴に切られてい。全体的に大型の柱穴から構成され、全ての柱穴が60cm以上である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表7の通りである。

出土遺物 P1・P2・P3・P5から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

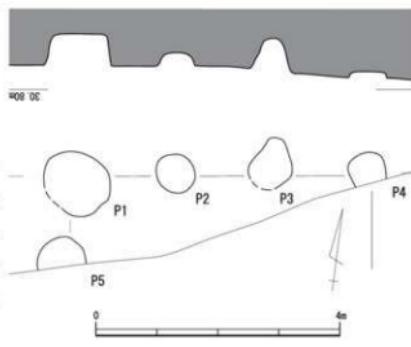
P1出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の口縁部(壺Ea)と体部片が出土している。口縁部片は丸胴タイプに分類されるものである。体部片は小片で、外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。須恵器は杯の体部片が出土している。

P2出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

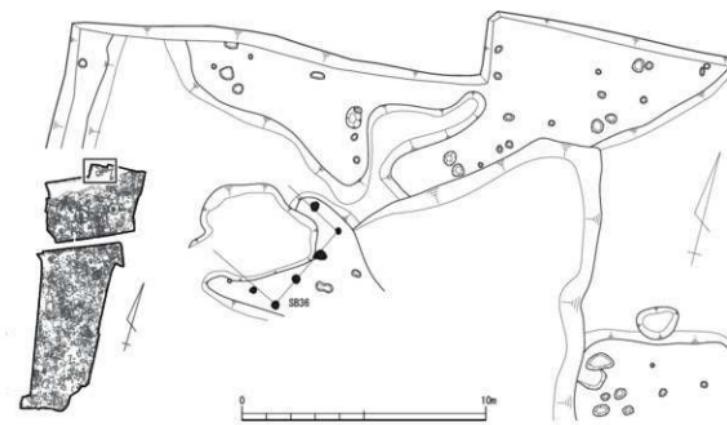
P3出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

P5出土土器 土師器の椀の底部から体部にかけての破片が出土している。

時期 SB32との切り合い関係・出土遺物から、南構Ⅳ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。



第124図 SB35



第125図 建物群4

5. 建物群4

北地区北端部中央にあたる(第79図)。SB36の1棟のみからなる。建物群5の北側、建物群8の西側にあたる。

SB36(附表7)

検出状況 北地区北端部で検出した(第79図)。建物の多くは後世の擾乱を受け、全体は検出されていない。推定される規模から、約1/2の範囲が検出されたものと考えられる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

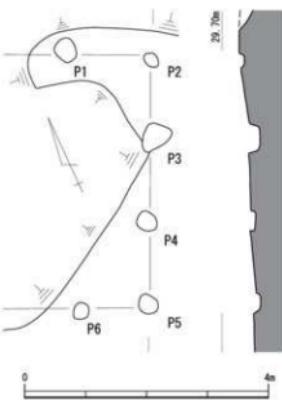
建 物 北東～南西方向に棟軸をもつ建物で、桁行3間の建物である(第126図)。梁行については両側とも1間分を検出したにとどまる。総柱・側柱の判断はできないが、後者の可能性が高い。全般的に柱通りは良好である。

建物の規模は、南東桁行(P2-P5)で4.00mを測り、これを基準とした棟軸方向はN26°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表7の通りである。

柱 穴 全体が検出されたのは、南東桁行の柱穴に限られる。P3を除いては比較的同規模の柱穴である。埋土は全て黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を検出した柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表7の通りである。

出土遺物 全く出土していない。

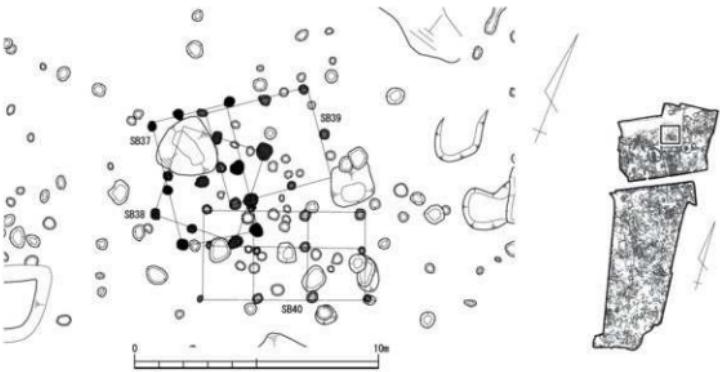
時 期 出土遺物・棟軸方向から時期を判断することは困難である。



第126図 SB36

6. 建物群5

建物群4の南側、建物群6の北側に位置し(第79図)、4棟(SB37～SB40)からなる建物群である。



第127図 建物群5

SB37(附表7)

検出状況 建物群5北西部に位置する。建物全体が検出されている。SB38～SB40と平面的に一部が重複している(第127図)。ただしこれらの建物との切り合い関係は認められず、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。

建 物 北西－南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間からなる柱建物である(第128図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。ただし、北西梁行の中間柱は全体的にP1側へ寄った位置にある。さらに南東梁行の中間柱については、土壤と平面的に重なるため検出できなかった。

建物の規模は、南東梁行(P5-P6)で3.00m、南西桁行(P1-P6)で5.05mを測り、両者を基準とした建物の面積は15.15m²である。南西桁行(P1-P6)を基準とした棟軸方向は、N36°15' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表7の通りである。

柱 穴 南東梁行の中間柱を除く柱穴が検出さ

れている。柱穴の平面形は隅丸方形傾向にある。全体的にはほぼ同規模の柱穴である。すべての柱穴においても柱痕は確認されていない。埋土はいずれも暗黒灰色シルト混じり極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表7の通りである。

出土遺物 遺物は全く出土していない。

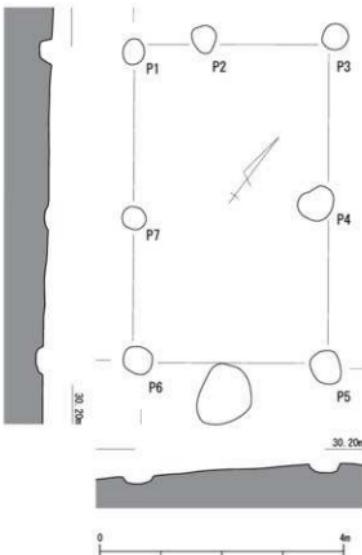
時 期 出土遺物から時期を判断することは困難である。建物の方位から判断して南構Ⅶ－2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB38(図版11 附表7・36)

検出状況 建物群5の西側に位置する(第127図)。建物全体が検出されているが、北西隅は後世の搅乱を受けていた。本建物の南東隅とSB40の北西隅が平面的に重複し、P3がSB40のP2に切られている。この他、SB37・SB39とも平面的に重複しているが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかつた。

建 物 ほぼ南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間からなる総柱建物である(第129図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。ただし南北両梁行の中間柱は、ともに西側へ寄った位置にある。

建物の規模は、南梁行(P4-P6)で3.50m、東桁行(P2-P4)で4.00mを測り、両者を基準とした建物の面積は14.00m²である。東桁行(P2-P4)を基準とした棟軸方向はN5°30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表7の通りである。



第128図 SB37

柱 穴 北西隅の1穴を除いてすべての柱穴が検出されている。ただし、P4の一部が他の柱穴に切られている。またP1は後世の擾乱を受け、一部を欠く。柱穴の平面形は、円形もしくは隅丸方形傾向にある。どの柱穴においても柱痕は確認されていない。埋土はいずれも黒灰色シルト混じり極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表7の通りである。

出土遺物 P1・P2・P3・P8から土器が出土している(図版11)。

P1出土土器 土師器の壺の口縁部(壺Gd)が出土している。

P2出土土器 土師器の杯A(274)が出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、底部外面にわずかにヘラ切り痕が認められる。以上から当個体について杯Aと判断し、杯Addに細分される。外面に赤彩が認められる。

P3出土土器 須恵器の小片が出土している。器種の特定は困難であるが、胎土の特徴から8世紀代の製品と考えられる。

P8出土土器 土師器の杯類・鍋・壺が出土している。杯類は底部片が出土している。鍋は体部から頸部にかけての一部が出土している。体部内面はヘラ削りが施されている。壺は体部の小片で、外面には煤の付着が認められる。

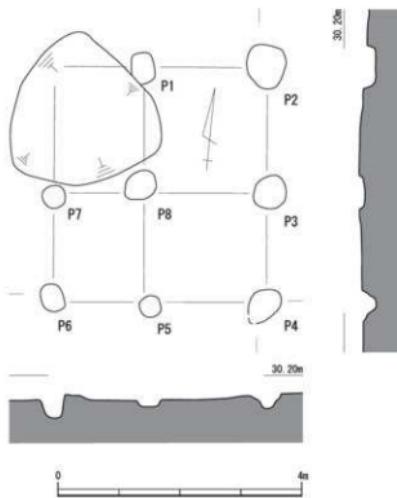
時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB39(図版11 附表8・36)

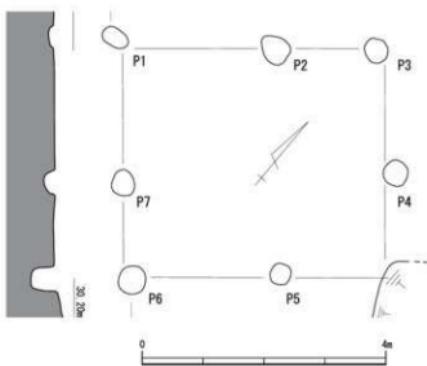
検出状況 建物群5内北部中央に位置し、SB37・SB38と平面的に重複している(第127図)。建物全体が検出されているが、東隅が後世の擾乱を受けている。SB37・SB38との前後関係については、調査では明らかにすることはできなかつた。

建 物 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第130図)。北東桁行と北西梁行の柱通りに乱れが認められる。

建物の規模は、北西桁行(P1-P3)で



第129図 SB38



第130図 SB39

4.30m、南西梁行(P1-P6)で4.00mを測り、両者を基準とした建物の面積は17.20m²である。北西桁行(P1-P3)を基準とした棟軸方向はN51° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表8の通りである。

柱 穴 東隅の1穴を除く全ての柱穴が検出されている。30cm~50cm大とほぼ同規模の柱穴からなる。平面形は、多くが円形もしくは隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂~細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表8の通りである。

出土遺物 P1とP3から土器が出土している。

P1出土土器 土師器の杯Aが出土している。内外面とも赤彩が認められる。

P3出土土器 土師器の杯(275)が出土している。体部から口縁部にかけて残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。内外面とも赤彩が認められる。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

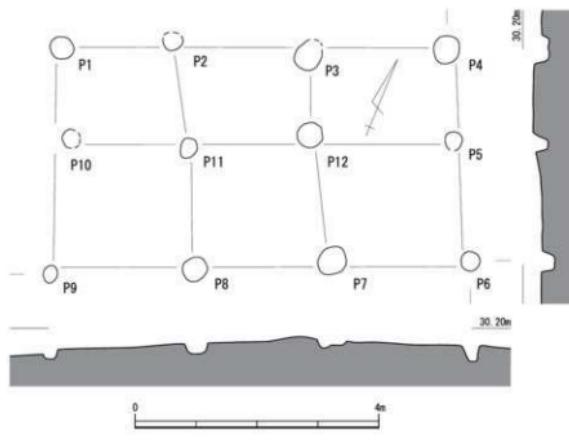
SB40(写真図版38 附表8)

検出状況 建物群5の南側に位置し(第127図)、建物全体が検出されている(第131図)。建物の北西隅とSB38の南東隅が平面的に重複し、P2がSB38-P3を切っている。

建 物 北東-南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間からなる総柱建物である(第132図)。桁行については平行関係にあるが、梁行は柱通りが乱れ、全体的にやや歪んだ平面形をなしている。建物内の東柱についても、桁行方向については柱通りが良好であるが、梁行方向については良好ではない。建物の規模は、南桁行(P6-P9)で6.90m、東梁行(P4-P6)で3.50mを測り、両者を基準とした建



第131図 SB40の調査



第132図 SB40

物の面積は24.15m²である。また南桁行(P6-P9)を基準とした棟軸方向はN67° 15' Eを示している。

柱 穴 すべての柱穴が検出されている。また、P2・P3・P5・P10の一部が他の柱穴に切られている。柱穴の平面形は円形傾向にある。いずれの柱穴においても柱痕は確認されていない。埋土は黒灰色シルト混じり極細砂もしくは黒灰色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表8の通りである。

出土遺物 P11とP12から土器が出土している。いずれも小片のため固化できなかった。

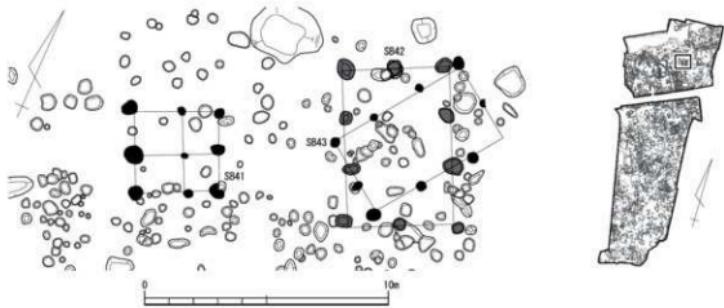
P11出土土器 土師器の甕の体部の小片が出土している。外面には煤の、内面には焦げの付着が認められる。

P12出土土器 土師器の甕の体部片が出土している。丸胴タイプに分類される甕で、外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。全体的に器壁が薄く仕上げられている。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

7. 建物群6

北地区中央部に位置し、建物群5の南側、建物群7の北側に位置する(第79図)。3棟の建物(SB41～SB43)からなる建物群である(第133図)。異なる建物群としたが、建物群7の一部と有機的な関連が認められる。



第133図 建物群6

SB41(附表8)

検出状況 建物群6内西側に位置し(第133図)、建物全体が検出されている。他の建物との重複は認められない。SB42・SB43の西側に位置し、SB42と棟軸方向を同じくしている。

建 物 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間からなる総柱建物である(第134図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、ほぼ同規模で、平面形はほぼ整った方形をなしている。柱通りについても比較的良好である。ただし、北東・南北両梁行の中間柱および建物中央柱とも南東桁行側へ寄った位置にある。建物の規模は、南東桁行(P5-P7)で3.45m、南西梁行(P1-P7)で3.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は12.07m²である。南東桁行(P5-P7)を基準とした棟軸方向はN66° 15' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表8の通りである。

柱 穴 すべての柱穴が検出されている。このなかでP5の一部が他の柱穴に切られている。柱穴の平面形は円形傾向にあり、規模の差が顕著である。いずれの柱穴においても柱痕は確認されていない。

埋土はいずれも暗灰色シルト混じり極細砂もしくは暗灰色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表8の通りである。

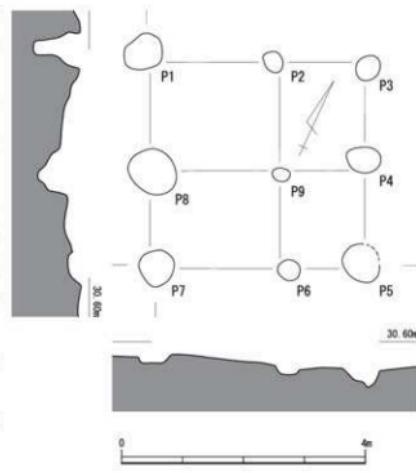
出土遺物 P5とP7から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかつた。

P5出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。内面はヘラ削りにより、外面は斜方向のハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

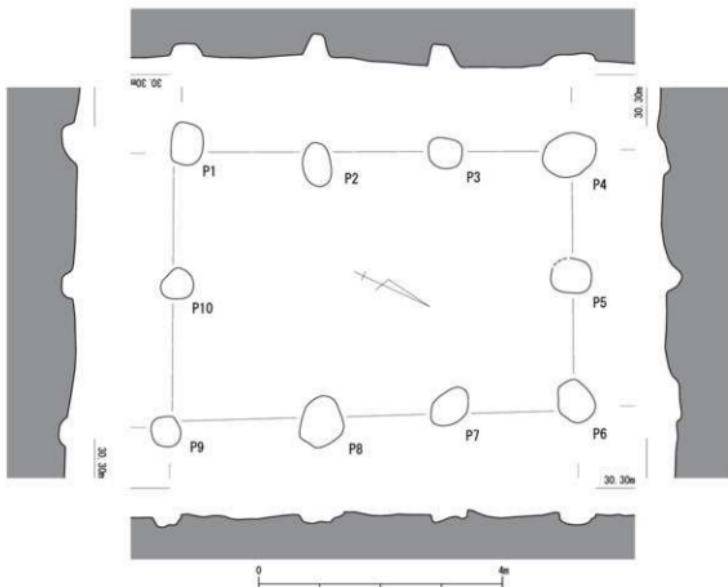
須恵器は、口縁部から底部にかけて残存する皿が出土している。

P7出土土器 須恵器の杯Aの底部片が出土している。

時一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第134図 SB41



第135図 SB42

SB42(図版11 附表8・36)

検出状況 建物群6内の東側に位置し(第133図)、建物全体が検出されている。SB41の東側に位置する。SB43とは平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。また、他の遺構との顕著な切り合い関係は認められなかつた。

建 物 北西－南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間からなる側柱建物である(第135図)。梁行は平行関係にあるが、桁行に関してはやや平行性を欠く。このため、平面的にはわずかに台形傾向にある。柱通りはほぼ良好である。建物の規模は、南西桁行(P1-P4)で6.30m、南東梁行(P1-P9)で4.70mを測り、両者を基準とした建物の面積は29.61m²である。北東桁行(P6-P9)を基準とした棟軸方向はN26°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表8の通りである。

柱 穴 全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、隅丸方形もしくは梢円形傾向にある。規模については、P3・P9・P10を除いては60cmを超え、全体的に大型である(第136図)。いずれの柱穴においても柱痕は確認されていない。埋土はいずれも暗灰色シルト混じり極細砂1層からなるが、P2においては基盤層の黄褐色極細砂の混入が認められた。各柱穴の規模は



第136図 SB42-P3断面

附表8の通りである。

出土遺物 P7・P9・P10を除く各柱穴内から土器が出土している(図版11)。

P1出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と壺が出土している。杯は底部片が出土している。壺は頸部片と体部片が出土している。体部片は丸胴タイプの一部で、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器は壺の体部片が出土している。外面が叩き整形後カキ目が施され、内面には当て具痕が認められる。

P2出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は、椀杯類の底部片と壺の体部片が出土している。椀杯類の内外面には赤彩が認められる。壺は、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

須恵器は杯蓋と壺が出土している。杯蓋は天井部が残存し、外面はヘラ削りにより仕上げられている。壺は、外面が叩き整形により仕上げられ、内面には当て具痕が認められる。

P3出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は、杯A(276)と壺が出土している。276は杯AF4に細分され、底部が回転糸切りにより切り離されている。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられ、体部下端外面はヘラナデにより仕上げられている。内外面に赤彩が認められる。壺は口縁部片が出土しており、外面には煤の付着が認められる。須恵器は小片のため器種の特定も困難である。

P4出土土器 土師器の鍋と壺が出土している。鍋は体部片が出土しており、外面はハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。壺は、壺Icに分類される口縁部片が出土している。外面には煤の付着が認められる。

P5出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は椀杯類と壺が出土している。椀杯類は体部片が出土し、内面には赤彩が認められる。壺は丸胴タイプに分類される体部片が出土しており、外面が

ハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。

須恵器は杯B(277)と壺の体部片が出土している。277は底部を中心に残存し、高台が貼り付けられ、回転ナデにより仕上げられている。

P 6 出土土器 須恵器の椀杯類の小片と壺が出土している。椀杯類は口縁部片と底部片が出土している。壺は体部の小片が出土している。内外面ともナデにより仕上げられている。

P 8 出土土器 土師器の椀杯類が出土している。底部片と口縁部片が出土しており、底部片の内外面には赤彩が認められる。

時 一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB43(附表8)

検出状況 第3次調査と第4次調査で検出された建物である。ただし、第4次調査区間にあたる建物東隅を検出することはできなかつた。建物群6内の東側にあり、SB41の東側に位置する(第133図)。SB42と平面的に重複しているが、前後関係について調査では明らかにすることはできなかつた。

建 物 北東-南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第137図)。梁行、桁行ともに平行で、全体的に整った平面形をなしている。ただし北東隅の1穴を検出することはできなかつた。また、両桁行における中間柱の位置は対応していない。

建物の規模は、南西梁行(P5-P7)で3.35m、北西桁行(P1-P7)で6.05mを測り、両者を基準とした建物の面積は20.26m²である。北西桁行(P1-P7)を基準とした棟軸方向はN35°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表8の通りである。

柱 穴 東隅の1穴を欠く以外、全ての柱

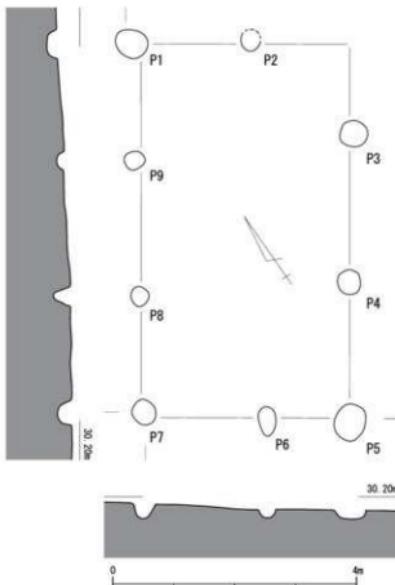
穴が検出されている。全体的に小規模な柱穴からなり、平面形は円形傾向にあるものが多く認められる。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表8の通りである。

出土遺物 P2とP7から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかつた。

P 2 出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。丸胴タイプに分類され、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

P 7 出土土器 土師器の杯が出土している。底部から体部にかけて残存する小片である。

時 一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第137図 SB43

8. 建物群7

建物群3の東側、建物群6の南側にある建物群である(第79図)。14棟(SB44～SB57)の建物からなり、中央部を中心に複雑に重複している(第138図)。



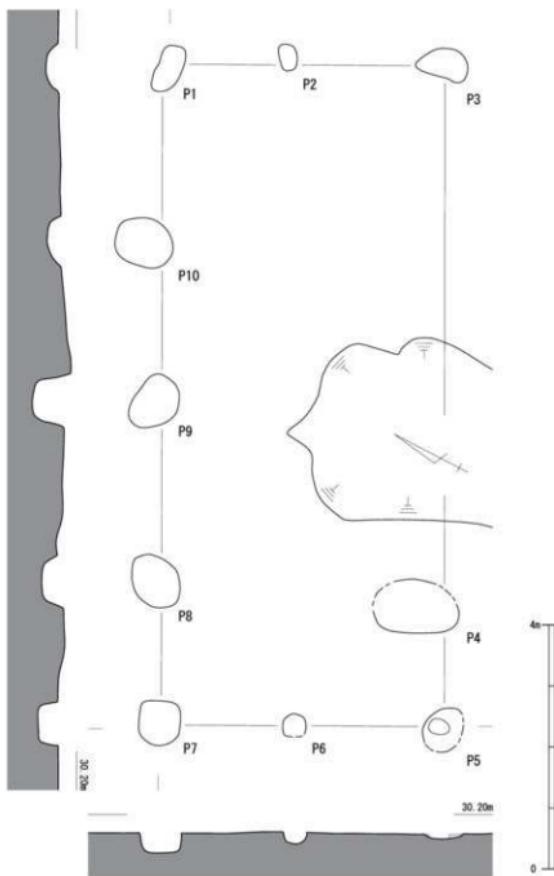
第138図 建物群7

SB44(図版11 附表9・36)

検出状況 建物群7の北側に位置する(第138図)。SB45の東側、SB47の北東、SB48～SB56の北側に位置する。SB46とは一部平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすらることができなかった。建物全体が検出されているが、南桁行の中間柱2穴を欠く。1穴は後世の擾乱によるものである。

建 物 北西～南東方向に棟軸をもつ棟行2間、桁行4間からなる側柱建物である(第139図)。桁行・梁行とも平行関係にあり、規模も同じである。このため、平面形は整った長方形をなしている。建物の規模は、南西梁行(P5～P7)で4.50m、北西桁行(P1～P7)で10.85mを測り、両者を基準とした建物の面積は48.82m²と大型の建物である。北西桁行(P1～P7)を基準とした棟軸方向はN63°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表9の通りである。

柱 穴 南東桁行の2穴を除いた柱穴が検出されている。ただし、P4とP5の一部は他の柱穴に切られている。梁行中間柱のP2とP6を除いては柱穴の規模が70cmを超えて、全体的に大型の柱穴が目立つ傾向にある。平面形についても、大型の柱穴は隅丸方形傾向にある。またP5を除いては柱痕は確認されていない。埋土はいずれも暗灰色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表9の通りである。



第139図 SB44

出土遺物 P1・P4・P5・P8～P10から土器が出土している(図版11)。

P1出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は、椀の底部片と甕の口縁部片が出土している。甕の口縁部は断面方形をなしている。須恵器は杯蓋と甕が出土している。杯蓋は焼成が不十分な製品で、天井部の2/3の範囲が回転ヘラ削りにより仕上げられている。

P4出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯の底部片が出土している。須恵器は甕の体部片が出土している。外面は叩き整形により仕上げられ、内面は当て具痕がナデにより消されている。

P5出土土器 土師器の甕の体部片が出土している。外面は縱方向のハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

P8出土土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器は杯Aの底部片、杯の体部片、甕の口縁部片が出土している。

須恵器は椀B(279)と杯B蓋が出土している。279は椀Bcに分類され、底部から体部にかけて残存する。底部は回転系切り後高台が貼り付けられている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

P9出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は椀と甕Abが出土している。椀は体部片が出土しており、内面には赤彩が認められる。甕は口縁部が残存し、外面には煤の付着が認められる。

須恵器は椀(280)が出土している。280は椀Daに分類され、平高台をなす底部を中心に残存する。内面見込みの落ち込みは認められない。底部は回転系切りにより切り離され、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

P10出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は、杯Aの底部片が出土している。

須恵器は皿A(278)と杯B蓋が出土している。278は完形に復元できる個体で、皿Acに分類される。口縁部は直線的なのび、端部が丸くおさめられている。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。内面見込みには仕上げナデが認められる。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB45(図版11 附表9・36)

検出状況 建物群7内北西部、SB44の西側に位置する(第138図)。一部がSB46と平面的に重複しているが、前後関係については調査では明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建 物 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の個柱建物である(第140図)。東西の梁行は平行関係ではなく、全般的にやや歪んだ平面形をなしている。建物の規模は、北桁行(P1-P3)で4.40m、西梁行(P1-P7)で2.35m

を測り、両者を基準とした建物の面積は10.34m²と小規模な建物である。北桁行(P1-P3)を基準とした棟軸方向はN85°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表9の通りである。

柱 穴 全ての柱穴が検出されている。P4の一部は他の柱穴に切られている。平面形は、梢円形傾向にあるものが多く認められる。またP1の検出面からの深さが61cmと、極端に深くなっている。

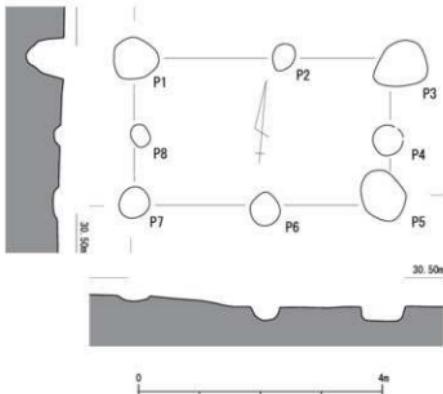
埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表9の通りである。

出土遺物 P1～P3・P6から土器が出土している(図版11)。

P1出土土器 須恵器の壺の肩部片が出土している。

P2出土土器 土師器の甕Gdの口縁部片が出土している。

P3出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は椀杯類の口縁部片が出土している。



第140図 SB45

須恵器は壺の体部片と杯A(281)が出土している。281は杯Ahに分類され、底部がハラ切りにより切り離されている。他は外面とも回転ナデにより仕上げられている。なお壺については、詳細な器種の特定は困難である。

P6出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と壺が出土している。杯は口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも精良な胎土である。壺は丸胴タイプの体部片が出土している。外面はハケ、内面はハラ削りにより仕上げられている。

須恵器は、底部から体部にかけて残存する杯の小片が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB46(図版11 附表9・36)

検出状況 建物群7の北西部に位置し、SB44・SB45・SB47と平面的に重複している(第138図)。ただし、これらの建物との前後関係については、調査では明らかにすることはできなかった。他の遺構との顕著な切り合い関係も認められず、建物全体が検出されている。

建 物 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の矩形建物である(第141図)。西梁行と南桁行の柱通りに乱れが認められる。建物の中心柱(P9)についても、梁行・桁行とも柱通りは良好である。桁行・梁行とともに同規模で、平面的に整った方形をなしている。

建物の規模は、北桁行(P1-P3)で3.40m、西梁行(P1-P7)で3.00mを測り、両者を基準とした建物の面積は10.20m²である。北桁行(P1-P3)を基準とした棟軸方向はN71° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表9の通りである。

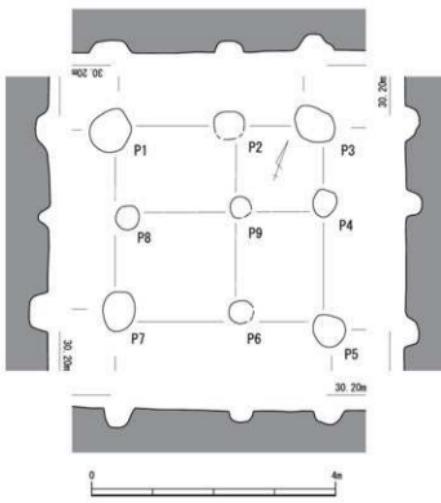
柱 穴 全ての柱穴が検出されている。このなかでP2・P9・P6は、その一部が他の柱穴に切られている。4隅の柱穴の規模が大きく、他の柱穴がやや小型の傾向が認められる。平面形は、円形もしくは隅丸方形傾向にあるものが多く認められる。

埋土はすべて黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表9の通りである。

出土遺物 P3とP9から土器が出土している(図版11)。

P3出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は椀杯類と壺が出土地している。

椀杯類は底部の小片である。壺は壺Fc(282)と体部片が出土している。282は壺Fcに分類され、体部から口縁部にかけて残存する。口縁部は「く」字形をなす。体部から口縁部内面を横方向、外面向き方向のハケの後、口縁部内外



第141図 SB46

面が横ナデにより仕上げられている。内面には焦げの付着が認められる。

この他、甕については体部片が出土しており、内面がナデ、外面がハケにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。

須恵器は杯の底部片が出土している。

P9出土土器 土師器の甕の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられ、煤の付着が認められる。

時期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB47(附表9)

検出状況 建物群7の北西部に位置し、SB44の南西側に位置する(第138図)。SB46と平面的に重複するが、切り合い関係は認められない。また、他の遺構との切り合い関係も認められず、建物全体が検出されている。

建物 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の個柱建物である(第142図)。梁行・桁行ともに平行関係にあるが、南東梁行と北東桁行の柱通りは乱れている。両桁行における中間柱の位置は、南東側へ寄った位置にある。北西梁行の中間柱についても北東側へ寄っている。

建物の規模は、北西梁行(P1-P3)で3.25m、南西桁行(P1-P7)で3.80mを測り、両者を基準とした建物の面積は12.35m²である。南西桁行(P1-P7)を基準とした棟軸方向はN41°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表9の通りである。

柱穴 全ての柱穴が検出されている。南東梁行の柱穴の規模が他より大型である。柱穴の平面形は、隅丸方形傾向にあるものが多く認められる。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表9の通りである。

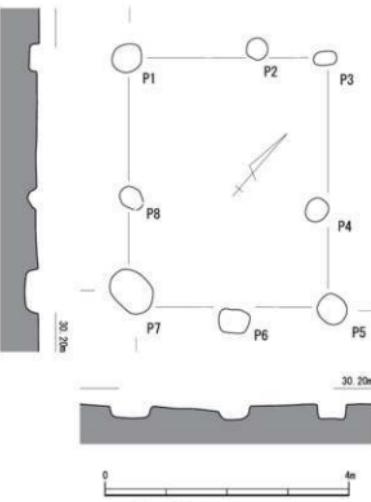
出土遺物 P5とP7から土器が出土している。いずれも小片のため固化できなかった。

P5出土土器 土師器の甕もしくは鍋の口縁部片が出土している。

P7出土土器 土師器の杯A・椀・甕が出土している。杯Aは底部の小片が、椀は口縁部片が出土している。

甕は口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は甕Gdに分類されるもので、丸胴タイプの甕と考えられる。体部片は、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

時期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第142図 SB47

SB48(図版11 附表9・36)

検出状況 建物群7の中央部に位置し、SB44の南側に位置する(第138図)。P7がSB49のP8を切っている。この他SB49～SB52と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。また建物の北端中央は後世の擾乱を受け、北西梁行の中間柱を欠く。

建 物 北西－南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第143図)。桁行・梁行ともに平行関係にならず、建物の平面形は台形をなす。柱通りについて良好とは言い難い。

建物の規模は、南東梁行(P4～P6)で4.00m、南西桁行(P1～P6)で4.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は18.00m²である。南西桁行(P1～P6)を基準とした棟軸方向はN51°45'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表9の通りである。

柱 穴 北西梁行の中間柱を除く以外、全ての柱穴が検出されている。ほぼ同規模の柱穴からなり、平面形も円形もしくは隅丸方形傾向にある。

埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表9の通りである。

出土遺物 P3とP7から土器が出土している(図版11)。

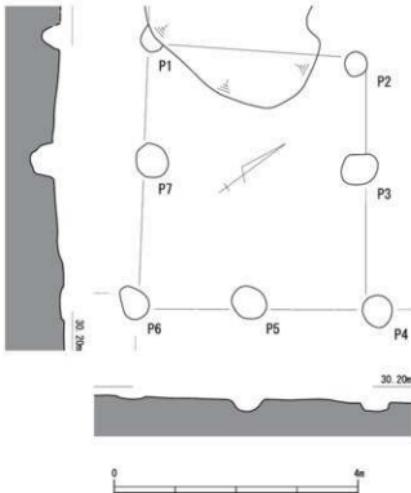
P3出土土器 土師器の杯の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

P7出土土器 土師器の椀(283)と壺が出土している。

283は椀Adに分類され、底部から体部にかけて残存する。底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。壺は丸胴タイプの体部片が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅱ～Ⅳ期に位置付けられる

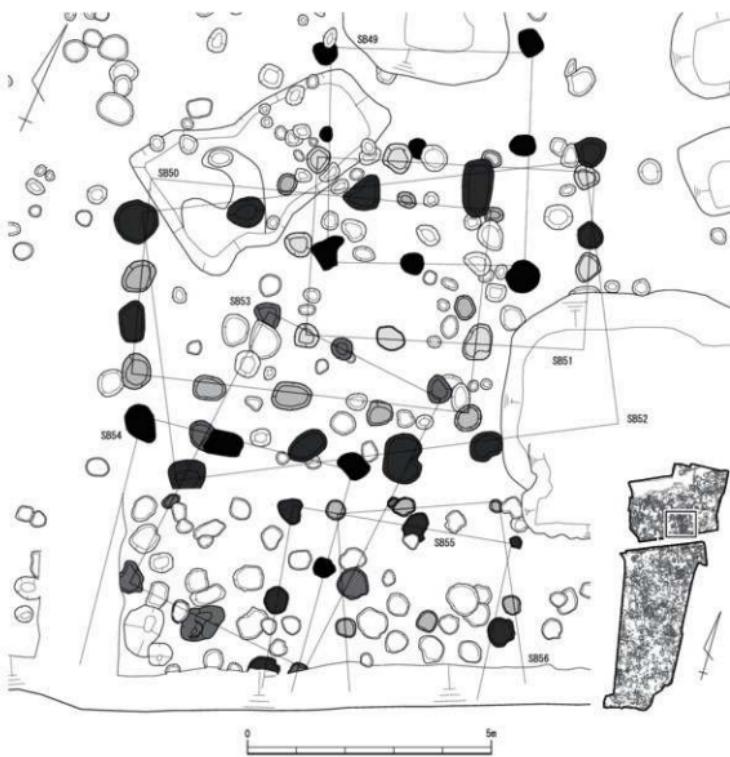
(第7章第1節)



第143図 SB48



第144図 建物群7の調査



第145図 建物群7 (SB49～SB56)

SB49(図版11 附表10・36)

検出状況 建物群7の中央部に位置し、SB44の南側、SB47の南東側に位置する(第138図)。SB48・SB50～SB52と平面的に重複し(第145図)、本建物のP8がSB48のP7とSB51のP8に、それぞれ切られている。建物の北端中央は後世の搅乱を受け、北梁行の中間柱を欠く。

建 物 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の純柱建物である(第146図)。桁行については平行関係にあるが、梁行については平行関係はない。このため、建物の平面形は台形傾向にある。柱通りは全体的に良好である。建物の規模は、南梁行(P4-P6)で4.00m、東桁行(P2-P4)で4.85mを測り、両者を基準とした建物の面積は19.40m²である。東桁行(P2-P4)を基準とした棟軸方向はN 20° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表10の通りである。

柱 穴 北梁行の中間柱を除く全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、P6が不定形、P7が円形である以外、隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。

また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表10の通りである。

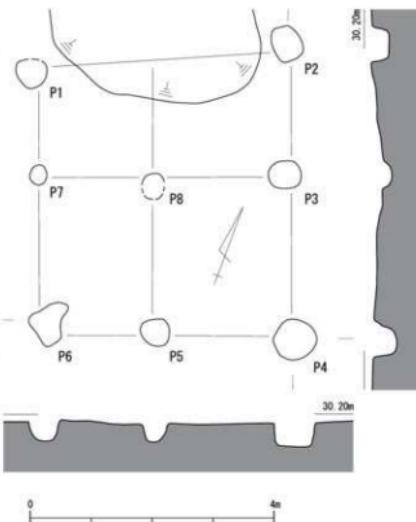
出土遺物 P2・P3・P4から土器が出土している(図版11)。

P2出土土器 土師器の椀杯類と甕が出土している。椀杯類は口縁部の小片が出土している。甕は体部の小片が出土しており、外面には煤の付着が認められる。

P3出土土器 土師器の杯A・椀杯類・甕が出土している。杯Aと椀杯類は底部の、甕は体部の、いずれも小片が出土している。

P4出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯A・杯・甕Ecが出土している。杯Aは底部片が出土しており、赤彩が認められる。杯と甕Ecは口縁部片が出土している。

須恵器は杯Aの底部片と皿A(284)が出土している。284は皿Acに分類され、口縁部が短く外反し、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。



第146図 SB48

時一期 SB48との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB50(図版11 附表10・36)

検出状況 建物群7の中央部に位置し、SB47の南側に位置する(第138図)。SB48・SB49・SB51～SB53と平面的に重複し(第145図)、P3がSB52のP11に切られている。他の建物との前後関係については調査で明らかにすることはできなかった。また建物北西隅は土壤と平面的に重複し、検出できなかった。

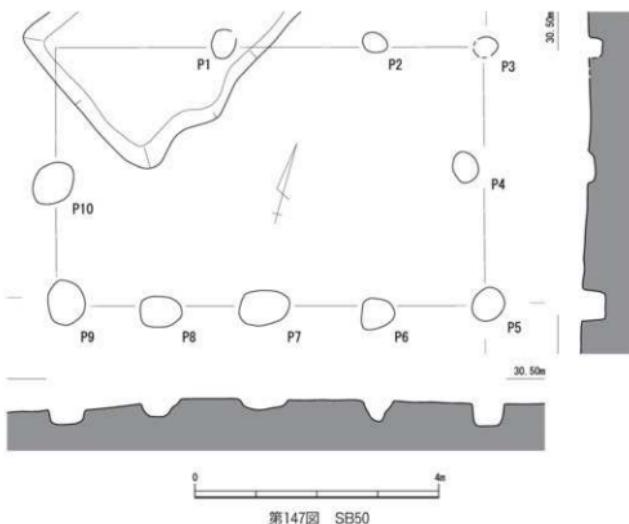
建物 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行4間の柱建物である(第147図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。ただし、先述したように北西隅の1穴は検出できなかった。梁行の中間柱については、柱通りに乱れが認められる。

建物の規模は、南桁行(P5～P9)で6.90m、東梁行(P3～P5)で4.25mを測り、両者を基準とした建物の面積は29.32m²である。南桁行(P5～P9)を基準とした棟軸方向はN75°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表10の通りである。

柱穴 北西隅を除く全ての柱穴が検出されている。南桁行から西梁行にかけての柱穴は50cm以上の規模からなり、全体的に大型である。平面形は、楕円形もしくは隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表10の通りである。

出土遺物 P4・P7～P9から土器が出土している(図版11)。

P4出土土器 土師器の杯(286)と皿A(285)が出土している。286は口縁部を中心に残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。外面には赤彩が認められる。285は皿Ad2に分類され、底部外側が



第147図 SB51

ナデ、口縁部が横方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面は、底部から口縁部にかけて横ナデにより仕上げられている。内外面に赤彩が認められる。

P7出土土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器は杯Aと甕が出土している。杯Aは底部片で外面に赤彩が認められる。甕は甕Ecに分類される口縁部片と体部片が出土している。体部片は丸胴タイプに分類されるもので、外面はハケにより仕上げられ、煤の付着が認められる。

須恵器は甕の体部片が出土している。

P8出土土器 土師器の甕の体部片が出土している。内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

P9出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は甕Gdが出土している。口縁部から体部にかけて残存し、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。須恵器は杯Bの底部片と杯の口縁部片が出土している。

時一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB51(図版11 附表10・36)

検出状況 建物群7の中央部に位置し、SB47の南東側に位置する(第138図)。SB48-SB50・SB52と平面的に重複している(第145図)。P8がSB49のP8を切り、P9がSB52のP11に切られている。他の建物との前後関係については、調査では明らかにすることはできなかった。さらに、他の遺構との明確な切り合い関係も認められない。また建物南東隅は後世の擾乱を受け、隅柱を欠く。

建物 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第148図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。柱通りについても比較的良好である。建物の規模は、西梁

行(P5-P7)で3.70m、北桁行(P1-P7)で5.45mを測り、両者を基準とした建物の面積は20.16nfである。北桁行(P1-P7)を基準とした棟軸方向はN70°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表10の通りである。

柱 穴 南東隅を除く全ての柱穴が検出されている。P9を除いてはほぼ同規模の柱穴からなり、平面形も梢円形もしくは隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表10の通りである。

出土遺物 P3・P7・P8・P9から土器が出土している(図版11)。

P3出土土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器は鉢(287)と甕が出土している。

287は口縁部を中心に残存し、無頸甕の可能性も考えられる。内外面とも継ハケの後、横ナデにより仕上げられている。体部付近はナデにより仕上げられている。甕は丸胴タイプの体部片が出土している。外面には煤の付着が認められる。

須恵器は甕(288)が出土している。288は外反する頭部に対して口縁部がわずかに内湾傾向にあるもので、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

P7出土土器 土師器の杯と甕が出土している。杯は底部の小片で、内外面に赤彩が認められる。甕は体部片が出土している。外面はハケにより仕上げられ、煤の付着が認められる。内面は焦げの付着が顕著で、調整は確認できない。

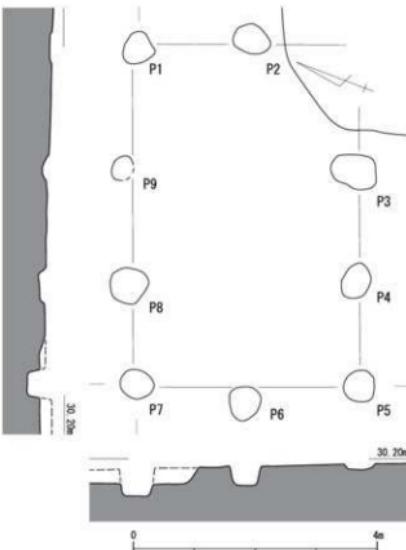
P8出土土器 土師器の杯と甕が出土している。杯は口縁部片が出土しており、赤彩が認められる。甕は長胴タイプの体部片が出土している。

P9出土土器 土師器の甕の体部片が出土している。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

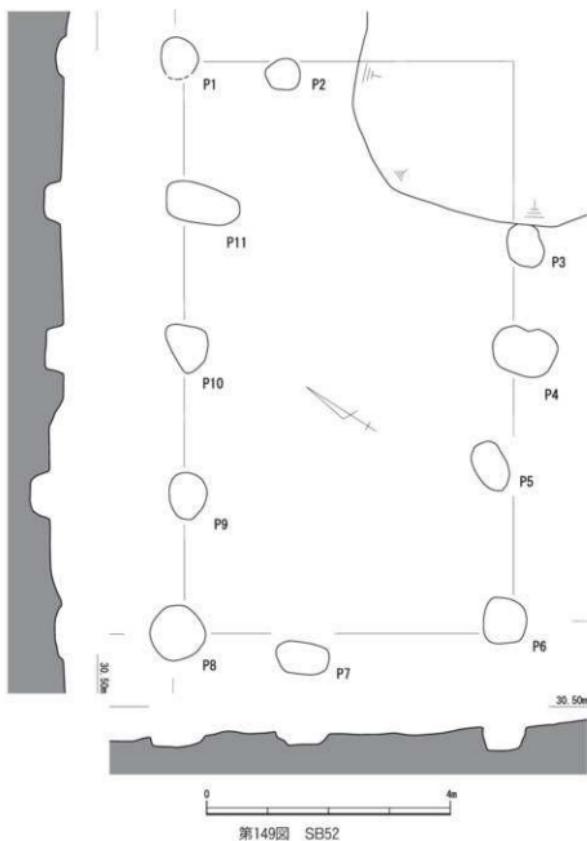
時 期 283がやや古相を示すが、出土遺物・棟軸方向から判断して、Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB52(図版11 附表10・37)

検出状況 建物群7の中央部に位置し、SB55・SB56の北側に位置する(第138図)。SB48～SB51・SB53・SB54と平面的に重複し(第145図)、P11がSB51のP9、P11がSB50のP3をそれぞれ切っている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。建物全体が検出されているが、東隅は後世の擾乱を受けている。



第148図 SB51



第149図 SB52

建 物 北東 - 南西方向に棟軸をもつ梁行 2 間、桁行 4 間からなる据立柱建物である(第149図)。梁行・桁行ともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。ただし、北西桁行を除く各辺の柱通りは乱れている。また両梁行の中間柱は、ともに北西側に寄った位置にある。建物の規模は、北西桁行(P1-P8)で9.45m、南西梁行(P6-P8)で5.40mを測り、両者を基準とした建物の面積は51.03m²と大型である。北西桁行(P1-P8)を基準とした棟軸方向はN58°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表10の通りである。

柱 穴 東隅の1穴を除く全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、隅丸方形もしくは梢円形傾向にある。柱穴の規模についても全体的に大型で、P4とP11では1mを超えており、柱痕を確認できた柱穴は認められない。埋土はいずれも暗灰色シルト混じり極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表10の通りである。

出土遺物 P1・P4~P7・P10・P11から土器が出土している(図版11)。

P1出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と甕が出土している。杯は、杯Aの底部から体部にかけて残存する個体と、内外面に赤彩が認められる体部片が出土している。甕は甕Eaと甕Ecの口縁部片が出土している。須恵器は楕の口縁部の小片が出土している。

P4出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と甕が出土している。杯は口縁部片が出土しており、赤彩が認められる。甕は口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は長胴に、体部片は丸胴にそれぞれ分類されるものである。須恵器は杯の口縁部片が出土している。

P5出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯・鍋・甕が出土している。杯は口縁部片と体部片が出土しており、体部片には赤彩が認められる。鍋は口縁部片が出土している。甕は丸胴タイプの体部片が出土している。須恵器は杯Bの底部片が出土している。

P6出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は体部片と甕Ecの口縁部片が出土している。体部片は内面がヘラ削りにより仕上げられ、口縁部片は外面に煤の付着が認められる。須恵器は杯Aの底部片が出土している。

P7出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は、杯皿類・鍋(292)・鍋もしくは甕の体部片が出土している。杯皿類は内外面に赤彩が認められる底部片が出土している。鍋もしくは甕の体部片については、外面に多量の煤の付着が認められる。292は鍋Abに分類され、口縁部から体部にかけてわずかに残存する。外面は、体部から口縁部にかけてハケの後口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のヘラ削り後ハケが部分的に加えられ、口縁部が横ナデにより仕上げられている。

須恵器は杯Aeに分類される杯A(291)が出土している。底部が回転ヘラ切りにより切り離されている。

P10出土土器 土師器の皿(289)と甕が出土している。289は口縁部のみ残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。また口縁部外面に煤の付着が認められ、灯明皿としての使用の可能性も考えられる。甕は体部片が出土しており、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

P11出土土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器は杯(290)・杯A・甕が出土している。290は口縁部を中心に残存する。口縁部はやや内湾傾向にあり、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯Aは精良な胎土からなる底部片が出土している。甕は体部片が出土しており、内外面ともハケにより仕上げられている。

須恵器は杯もしくは楕の口縁部片が出土している。焼成が不十分な個体である。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB53(図版11 写真団版74 附表10・37)

検出状況 建物群7の南部に位置し(第138図)、SB50・SB52・SB54~SB56と平面的に重複している(第145図)。P4がSB56のP6に、P10がSB54のP4に切られている。他の建物との前後関係については、調査では明らかにすることはできなかった。また建物南東隅の一部は調査区外に広がり、南西隅は後世の搅乱により、それ一部の検出にとどまる。

建 物 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第150図)。桁行・梁行とともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。ただし桁行の中間柱についてはその間隔が一定していない。建物の規模は、西桁行(P8-P1)で6.20m、北梁行(P1-P3)で3.90mを測り、両者を基準とした建物の面積は24.18m²である。西桁行(P8-P1)を基準とした棟軸方向はN3°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表10の通りである。

柱 穴 南西隅と南東隅の柱穴が一部を欠く以外、全ての柱穴が検出されている。柱穴の規模の差が顕著である。平面形は梢円形傾向のものが大半であるが、P8のように不定形のものも認められる。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表10の通りである。

出土遺物 P1・P9・P10から土器が出士している(図版11)。P10出土土器以外、小片のため図化できなかった。

P1出土土器 土師器の杯Aの底部片が出土している。

P9出土土器 須恵器の壺の体部片が出土している。内外面に軸の付着が認められる。

P10出土土器 土師器の杯A(294)と壺(293)が出土している。294は杯Af6に分類され、完形に復元できた個体である。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、内外面とも回転ナデにより仕上げられて

いる。内面見込みには仕上げナデが加えられている。外面に赤彩が認められる。

293は壺Jbに分類され、体部から口縁部にかけて残存する。「く」字形をなす口縁部の上部が、強い横ナデにより斜上方につまみあげられている。体部外面から口縁部にかけて縱方向のハケが施され、その後口縁部が横ナデにより仕上げられている。体部内面は斜方向のヘラ削りにより仕上げられ、その後頸部から口縁部にかけて横方向のハケが施され、最後に口縁部が横ナデにより仕上げられている。

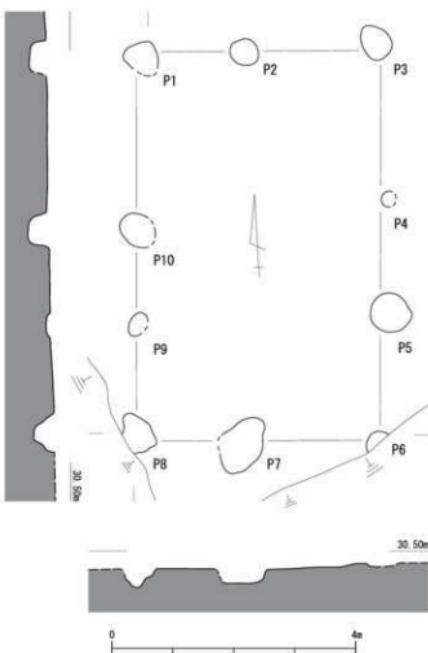
時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅳ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB54(附表11)

検出状況 建物群7の南部、SB57の東側に位置する(第138図)。SB52・SB53・SB55と平面的に重複し(第145図)、本建物のP4がSB53のP10を切っている。他の建物との前後関係については、調査では明らかにすることはできなかった。建物南側は調査区外まで拡がり、西側については後世の擾乱を受け、検出できたのは北側梁行と東側梁行の一部にとどまる。

建 物 南北方向に棟軸をもつ梁行2間の側柱建物である(第151図)。梁行については少なくとも2間はあるものと考えられる。北梁行(P1-P3)の規模は4.50mを測る。東梁行(P1-P2)を基準とした棟軸方向はN10° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表11の通りである。

柱 穴 4穴検出されている。柱穴の規模及び平面形はP2を除いてはほぼ一定で、平面形は方形傾



第150図 SB53

向にある。埋土は全て黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表11の通りである。出土遺物 P1とP3から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P1出土土器 土師器の壺が出土している。頭部から体部にかけて残存する長胴タイプの壺である。

P3出土土器 土師器と須恵器が出士している。土師器は杯Aと壺が出土している。

杯Aは底部を中心で残存し、内外面に赤彩が認められる。壺は体部片

と壺Ecの口縁部片が出土している。体部片は、内面がヘラ削り、外側がハケにより仕上げられ、外側には煤の付着が認められる。壺Ecは長胴タイプと考えられる。須恵器は杯もしくは挽の口縁部片が出土している。

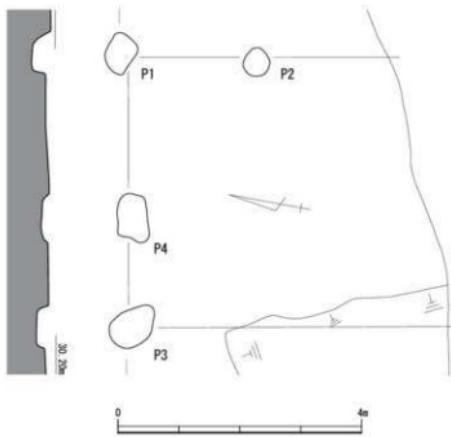
時一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅲ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB55(附表11)

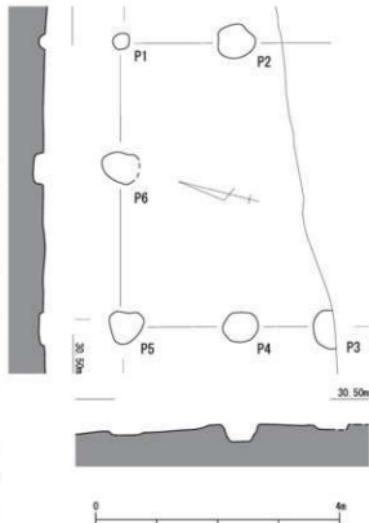
検出状況 建物群7の南部に位置し(第138図)、SB53・SB54・SB56と平面的に重複している(第145図)。ただし、これらの建物との前後関係については、調査では明らかにすることはできなかつた。また建物の南側は調査区外に拡がり、建物南東部を中心で未検出である。2間×2間の建物であるとすると、南東隅の1穴を欠くのみである。

建物 東西方向に棟軸をもつ桁行2間の側柱建物である(第152図)。他の建物規模から判断して、梁行2間の可能性も考えられる。両梁行が平行関係、梁行と桁行が直角関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。柱通りについても良好である。

建物の規模は、北桁行(P5-P1)で4.70mを測る。梁行が2間であるとすると、西梁行(P3-P5)で3.40mを測り、復原される建物の規模は15.98m²となる。北桁行(P5-P1)を基準とした



第151図 SB54



第152図 SB55

棟軸方向はN76° 30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表11の通りである。

柱 穴 6穴が検出されている。柱穴の規模及び平面形は、P1を除いてはほぼ一定している。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表11の通りである。

出土遺物 P2～P4から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P2出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。内面はヘラ削りにより仕上げられ、外面には煤が付着している。

P3出土土器 土師器の碗もしくは杯の体部片が出土している。精良な胎土である。

P4出土土器 須恵器の壺の体部片が出土している。外面は叩き整形により仕上げられ、内面はナデにより仕上げられている。

時 期 SB53・SB54との関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

SB56(附表11)

検出状況 建物群7の南東部に位置し(第138図)、SB53・SB55と平面的に重複している(第145図)。P6がSB53のP4を切っている。ただし、両建物との前後関係については調査で明らかにできなかった。また建物の南側は調査区外に抜がり、全体を検出できなかった。想定される建物の規模から約2/3の範囲を検出したものと考えられる。

建 物 北西～南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間以上の総柱建物である(第153図)。建物規模から判断して、2間×2間の総柱建物の可能性が高い。建物の規模は、北西桁行(P5-P1)で3.35mを測り、南西梁行(P5-P4)を基準とした棟軸方向はN27° 30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表11の通りである。

柱 穴 6穴が検出されている。柱穴の規模及び平面形はほぼ一定している。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表11の通りである。

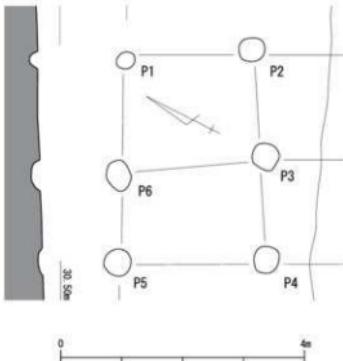
出土遺物 P1・P2・P6から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P1出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。丸胴タイプに分類されるもので、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

P2出土土器 須恵器の杯もしくは碗の口縁部片が出土している。

P6出土土器 土師器の壺の口縁部片が出土している。

時 期 SB53との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第153図 SB56

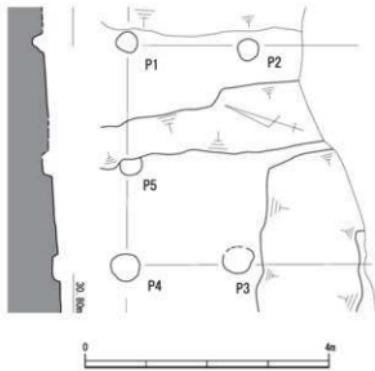
SB57(附表11)

検出状況 建物群7の南西隅に位置し、SB54の西側に位置する(第138図)。他の建物との平面的な重複、切り合い関係は認められない。P3が他の柱穴に切られている。

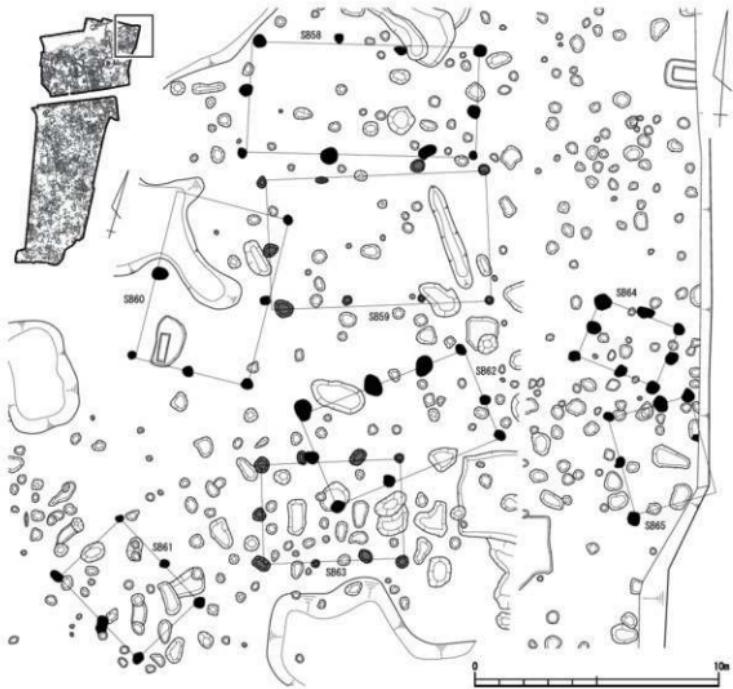
建物 南側を中心後に擾乱を受け、さらにその南側が調査区外に拡がっている。また、建物の棟軸ラインにおいても後世の擾乱を受けている。このため、P5についても全体が検出されていない。

建 物 南北方向に棟軸をもつ梁行2間の側柱建物である(第154図)。桁行は少なくとも2間はあるものと考えられる。北梁行(P1-P4)

の規模は3.70mを測る。東桁行(P1-P2)を基準とした棟軸方向はN18° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表11の通りである。



第154図 SB57



第155図 建物群8

柱 穴 5穴が検出されている。5穴はほぼ同規模で、平面形についても円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。

出土遺物 全く出土していない。

時 期 他の建物との切り合い関係および出土遺物から判断することは困難である。建物の方向性から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

9. 建物群8

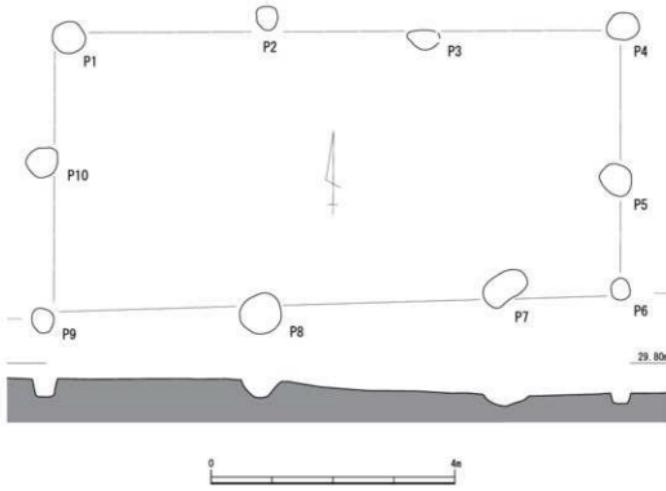
北地区北東部で検出された建物群である(第79図)。建物群4の東側、建物群5の北東側に位置する。8棟の建物(SB58～SB65)からなる(第155図)。他の建物群と比較して、建物相互の切り合い関係・平面的な重複はわずかである。

SB58(附表11)

検出状況 建物群8の北端部、SB59の北側に位置する(第155図)。他の建物および遺構との切り合い関係は認められない。このため建物全体が復元されている。

建 物 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の楕柱建物である(第156図)。桁行・梁行ともにほぼ同規模であるが、桁行が平行関係はない。このため、やや歪んだ平面形をなしている。北桁行(P1-P4)で9.10m、東梁行(P4-P6)で4.30mを測り、両者を基準とした面積は39.13m²である。北桁行を基準とした棟軸方向はN90° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表11の通りである。

柱 穴 全ての柱穴が検出されている。柱穴間に平面形・規模において差が認められる。平面形は、P7を除いては円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表11の通りである。



第156図 SB58